

# 教育講演 I

【12:40~13:40】



# 日常生活を切り取る多様な視点

—作業科学・作業療法の立場から—

近藤 知子

(帝京科学大学医療科学部作業療法学科)

KEY WORDS: 作業科学、作業療法、日常生活、健康

## I. はじめに

人の日常は、様々な活動から成り立っている。例えば、昨日の朝、私は、起床し、シャワーを浴び、朝食をとり、身支度を整え、仕事へと出かけた。一見切れ目のない朝の生活は、よく見ると、このような活動の連続として見ることができる。作業科学は、人が日常の中で従事する活動を「作業」と見なし、作業と人の関係を探究することを目的とする新しい学問である。

今日、作業療法は、「障害を持つ人の自立に向けた治療的援助」というよりは、「人が健康に作業従事することへの援助」という立場を取るようになった(WFOT,2012)。言い換えれば、障害をもつ人だけでなく、その人をとりまく人、障害を持たない人も含め、作業を通じ、豊かで質の高い生活が送れることを目指す。

ここでは、作業科学・作業療法が扱う「作業」という視点を紹介したい。

## II. 日常の中の作業

「作業」という概念は、絶え間なく流れていく時間と空間を切り取っていくツールである。例えば、作業という視点をいけば、先に述べた私の朝の生活は、「起床する」、「シャワーを浴びる」、「朝食をとる」「仕事に行く」などという作業で切り取ることができる。

作業は私たちが生活や人生の中で従事する活動であるが、リハビリテーション領域において一般的に使われ、全ての人が共通して行なう活動に重点を当てた「日常生活活動(ADL)」と同意ではない。ここでいう日常的な作業とは、その人にとって日常的なことである。例えば、宇宙飛行やそれに関わる活動は、通常は日常的である見なされないが、宇宙飛行士にとっては、日常的なものである。また、一生に一度しかない成人式への出席なども、特別なできごとかもしれないが、私たちの人生においては日常の中にあると考える事ができる。

作業はまた、従事によって生じる思い、感覚、記憶、感情といった主観的経験を伴うものである。これは、一見同じ名前前で呼ばれる作業も、実際には、一人一人が異なることを意味する。例えば山登りは、ある人にとっては、高く険しい山を、重い靴を履き、強い緊張感とともに登るものかもしれないが、別の人にとっては、緑の中を、おしゃべりをしながら、リラックスして登るものかもしれない。

このように、作業は、各個人がその人の生活や人生において従事するものであり、さらに、その人の主観的経験を伴うものである。

## III. 作業の多様な視点

日常生活を作業という視点から切り分けてみると、様々な事が見えてくる。例えば一つ一つの作業を、観察

可能な側面から吟味してみると、その作業を成り立たせる工程、設定や道具、姿勢や運動などと分析して行く事ができる。

人の生活は、作業間のバランスで見えることもできる。健康な人の生活は、ストレスのある作業とそれが軽減される作業とでバランスが取れているかもしれないが、不健康な人の生活は、ストレスの強い作業の連続的からなるかもしれない。作業バランスには、ストレスだけでなく、身体、他者との交流などもある。

日々の生活を、作業のルーティンから見ると見られる。従事する作業にある程度の規則正しさがあると、心身の無駄なエネルギー消費を避け、安定した生活を送る事ができる。ルーティンがない生活では、人は疲労し、場合によっては、圧倒されるという感覚を抱くかもしれない。

人が行なう作業を、その作業のもつ「意味」を通して見ると、ある人にとって、喫煙という作業は、リラックスの場であり、なくてはならないものであることがわかる。しかし、この作業に対して家族は、無駄遣いであり、健康を害する、必要のないものという意味を付与しているかもしれない。また、その人の属する社会では、自分や他者の健康に無配慮という意味づけをしているかもしれない。作業の意味が異なると、作業従事にあたり問題が生じる事がある。

作業はまた、その作業が、その人の発達や健康、質の高い生活にどのような影響を及ぼすか、という見方で見られることもできる。例えば、赤ちゃんにとって母乳を飲む作業は、身体を成長させる働きとともに、筋力、感覚、社会交流、感情の喚起や調整などの発達に影響を与える。老人にとって、日々の作業を規則正しく行い、自分が好きな作業に従事するという事は、心身の衰えを防ぐとともに、責任を全うし、自分らしくいられるといった満足感と繋がる。

## IV. 人と作業と健康

私たちの生活は、個性的で、しかも様々な事象に影響されながら進んで行く。そして、私達が日々行なうことは、私達がいきいきと、満足感をもって生きて行く事に重要な役割を果たす。日々の生活を、「作業」というツールで切り取り、上に記したような視点で分析することで、健康であることや健康を援助することへの手がかりが見えてくる。

(参考文献)

World Federation of Occupational Therapists (2012): Definition of Occupational Therapy. Retrieved from [www.wfot.org/aboutus/aboutoccupationaltherapy/definitionofoccupationaltherapy.aspx](http://www.wfot.org/aboutus/aboutoccupationaltherapy/definitionofoccupationaltherapy.aspx)



# 教育講演Ⅱ

【13:50～14:50】



# 障害児者支援の多様なアプローチ

—言語聴覚士・臨床心理士の立場から—

藤原 加奈江

(東北文化学園大学)

KEY WORDS: 乳幼児症状チェックリスト、情報収集シート、7つのステップ

## I. はじめに

発達障害支援の原則の一つは早期に発見し、社会適応に必要なスキルを提供し、また必要な環境調整を行い、二次障害を防ぐことにある。ここでは発達障害の中でも演者が取り組んできた幼児期自閉症スペクトラム支援に焦点を絞り、これを実現するための多様なアプローチについて、過去の実例を挙げながら共に考えたい。

自閉症スペクトラムは「社会的コミュニケーション及び社会的相互交渉の障害」と「行動、興味、活動の限局した反復的な様式」(DSM-V)で特徴づけられる発達障害であり、近年その発症率が増加し、本邦で1%を超える(Honda, et al, 2005)。その困難さは感覚、認知、言語コミュニケーション、注意、記憶、実行機能、構成、運動と広汎におよび、しかも、非自閉症者にとって想像し難い困難さが多く、支援には知識とスキルを要する。

自閉症スペクトラムの特性の一つに「応用が苦手」がある。これは指導・支援する方にとっては厄介である。言語聴覚士は多くの場合、病院や療育センターの訓練室で言語訓練を行い、日常場面での般化を期待する。しかし、自閉症スペクトラムは般化が困難。従って、支援の中心は病院や専門機関の訓練室ではなく、日常現場、すなわち、家庭、保育所/幼稚園、学校、学童保育等となり、保護者、保育士、教員、指導員らと連携を取り支援することが、臨床心理士や言語聴覚士の重要な仕事になる。

## II. 早期発見と乳幼児症状チェックリスト

演者はこの十数年宮城県内の2つの町の子育て支援事業に関わって来た。その内の一つM町で自閉症スペクトラムを含む発達障害の早期発見への取り組みとして、乳幼児症状チェックリストの活用を試みている。

本邦は世界に誇れる健診システムを持っており、殆どの乳幼児の発達を市町村がフォローできる。加えてM町では殆どの子供が就学前に町立の幼稚園か保育所に通うので、巡回により集団での姿もフォローできる。M町では1歳6カ月健診と2歳6カ月健診で事前に統制障害の症状を拾うために開発された乳幼児症状チェックリスト(Degangi, 2000)を保護者に記入し持参してもらい、自覚している子育ての困難さを効率的に拾うと同時に、観察の指標としている。チェックリストを使用している保護者のアンケートでは「健診で何を相談したいかが事前に確認できて良かった」など概ね好評であった。チェックリストと発達障害の関係を保護者アンケートの結果と合わせて紹介したい。

## III. 直接支援と保護者支援

保護者が心配して、或いは保健師や保育士の勧めにより専門機関(心理士、言語聴覚士)を訪れると一般に以下のような支援が提供される。

- ① 評価：発達検査、知能検査、言語コミュニケーション検査、高次脳機能検査、行動観察等。
- ② 訓練・指導：評価に基づき必要かつ優先順位が高いスキルの指導を個別、時に小グループで行う。カウンセリング：子供が困っている具体的な問題がある場合、その対処法を一緒に探る。
- ③ 助言：保護者が日常生活で児への対応で困っていることについて助言する。

これ以外に保護者の子供理解を支援するために保護者

対象の小グループ研修会が提供される。演者が行っている発達支援教室では①自閉症スペクトラムの一般的な特徴の理解、支援方法を学ぶ座学的なもの；②自分の子供の特徴や支援法を効率よく保育士や教師に伝えるためのサポートブック作り等のワークショップ；③困った問題への取り組み方を自分の子供の事例を通して学ぶものなどを提供している。

この他に年毎にテーマを決め、3回シリーズで講演会を持ち、支援者が一堂に会して支援について学び、考え、語り合う場を設けている。

## IV. 保育士支援と7つのステップ・アプローチ、情報シートの活用

W町では保育所、幼稚園、学童保育、通園施設に対して年各1~2回の心理士随同行の巡回相談を行っている。コンサルテーションをより効率的に行うと同時に、支援者各自が対処法を自分で考えられるよう、7つのステップ・アプローチと情報収集シートを考案し活用している。コンサルテーションでは客観的/主観的事実の確認、障害特徴や個人の特徴などの原因の推測、対応法の3つの側面など中核となる5つのステップに沿って相談したいことをまとめて置いて頂く。また、感覚、認知、言語コミュニケーション、注意、記憶、実行機能、構成、運動、対人能力、遊び、好き嫌いなどの情報をまとめた情報シートを一緒に添付して貰う。7つのステップの周知を図るために、使用開始年度から3年間は年度初めに2回の研修会を持った。7つのステップについては「書いていく内に対応法が思いついた」、情報シートについては「記入することで子供を見る視点が増えた」など概ね好評であった。コンサルテーションの実例を事例を挙げて紹介したい。

現在W町では担当児の支援に加え、健診後の心配なお子さん対象のフォローアップ教室での具体的な構造化の指導を通し、知識とスキルを持ったスーパービジョンができる保育士が育ち、巡回相談を待たずに相談できる体制ができてつづつある。

## V. 今後の課題

0歳代からの集中的支援の有効性が報告される現在、早期発見から如何に短期間で支援に結び付けさせるかは未だに大きな問題である。これには市町村レベルのより充実した専門家チームによる支援システムが必要となる。また、言語聴覚学の領域では、自閉症スペクトラムに有効な言語訓練プログラムの開発が未だ途上の段階にあり、急務である。加えて大学4年間では自閉症スペクトラムのような個人差の大きい複雑な症状に対応できるスキルを習得するのは難しく、卒後研修のための機関を設ける必要がある。

また、地域の保健師、保育士/幼稚園教諭と学校の連携、学校と社会との連携が必要であるが、支援が福祉と教育の間で途切れることが多く今後の課題である。個人を一貫して包括的に支援できる社会システムが待たれる。

## 参考文献

藤原加奈江 困った行動が教えてくれる自閉症スペクトラムの支援：7つのステップで対応法を探る 診断と治療社 東京 2009年

